

京都市バスの利便性向上に向けて

新川ゼミ チームリョージ

○ユ ヒョンウク (Yoo Hyunwook) 釜平 彩花 (Kamahira Ayaka) 田中 諒治
(Tanaka Ryoji)

秦 望実 (Hata Nozomi) 松本 萌 (Matsumoto Moe)
(同志社大学政策学政策学科)

キーワード:京都市バス、デザイン変更、アプリ活用

1. はじめに

京都市における観光客数は平成29年度の調査によると5362万人となり5年連続で5,000万人を超える結果となっている。また外国人観光客数も743万人と前年より増加しており、京都市における観光の魅力は年々増加傾向にあると言える。京都市観光についての満足度は日本人観光客、外国人観光客共に約9割を超える高い数字を出しているが、その一方で残念なことがあったと感じる観光客が日本人観光客では約4割、外国人観光客でも2割の人が感じているという結果も出ている。両者とも残念な点としてバスなどの公共機関、特に京都市バスの分かりにくさを上位に上げている。

このような問題点から私たちのグループは京都市バスの利便性を上げるために、バスのデザイン変更とアプリの活用という方法を用いた政策提案をしたい。

2. 現状分析

京都市では市バスにおける分かりやすさ向上を行なっている。まずバスの車体、バス停にラインカラーを取り入れている。ラインカラーとは南北の幹線道路にイメージカラーを設定し、どの方面にバスが向かうのかを分かるようにしているものである。主要観光地、地名などから連想しやすい色に設定している。次にバスの路線形態（均一、循環、他区間）を容易に判別できるよう、記号番号の地色を青、オレンジ、白の3色で表している。

これらのラインカラー、系統番号を目立たせるために方向幕の背景を黒にするなどモノトーンを基調とするデザインにしている。またバス停に設置されている地図については、実際の地形と地図の方向を合わせるようにしている。最後に京都市では、“歩くまち京都”アプリ「バス・鉄道の達人」というアプリを提供し、目的地までのルート検索が簡単で分かりやすくなるようにしている。このよう

に京都市では様々な対策を行なっているが、現状では不満を抱いた項目の上位としてバスが挙がる結果となっており、あまり効果が上げられていないように感じられる。

また、現在スマホは世界中で普及が進んでいる。海外旅行をするときにも、格安simやwi-fiの利用で使えるので、外せないアイテムである。しかし、スマホを持っていても、バス路線が複雑すぎて乗るのは難しい、道がわからないなどで困っている人が多く、紙地図を持って苦労して目的地にたどり着こうとしている人を多く見た。アンケートでも、公共交通機関に不満がある人が多かったのでこれは問題だと考えた。

そこで、スマホのアプリの現状などを調べた。現在世界でのスマホの所有者のうちiOSとAndroidで99%をしめる。この現状を鑑みて、これらに標準搭載されているGoogle map、Appleのmapを軸に考えるのがベストであると考えた。既存のアプリを選んだ理由は、大きく2点ある。新規に作るとコストがかかることと、アプリをダウンロードする手間がかかるからである。新規のアプリは確かに標準アプリより便利で詳しい情報が載せられる可能性がある。しかし、日本に訪れる観光客は、京都以外の場所も同時に観光するので、観光地ごとにアプリをダウンロードしてもらうのは非常に面倒であり、統一した方がわかりやすい。その地域に訪れる時にしか使えないというアプリは利用者目線では不便である。それに対して標準アプリはダウンロードする手間が省ける。

3. 提案-1

エリアごとにイメージカラーを定め、バスの行き先表示方法を変えることを提案する。これは観光客から挙がる不満のひとつで、バスが複雑でわかりにくいという声に対するアプローチである。幹線道路ごとの色分け・均一循環の色分け制度を廃止し、エリアごとに

新たなイメージカラーを定めることにより、京都に初めて来た観光客にも行き先を色で簡単に判断できるようにする。区分するエリアは、観光客が多く利用する京都市内中心部の観光スポット「金閣寺」「銀閣・東山」「四条河原町周辺」バスターミナルで主要駅の「京都駅」の4つとし、観光バスである洛バスと同一色を使用する。これまでの循環と均一の色区別は、同一料金且つ目的地の判断がエリアごとの色分けによって可能のため廃止する。これまでの循環バスとされた系統のバスの色表示は直近目的エリアの色をベースに表示し、目的地の文字の後ろに次に行くエリアの色を表示するなど、通る順番も大まかにバスを見ただけで識別できるようなものを目指す。方向幕だけでなく、現在行っている取り組みのひとつであるインターネットを活用したバスの接近表示器を設置することに並行して、バス停の表示板にも上記の色を上部に大きく表示し、その下に停留所など詳しい情報を記載し、わかりやすさ向上に努める。

4. 提案-2

これらの点から、標準アプリの活用がベストであると考えた。次にそれらのアプリの使い勝手だ。私たちは、これらが使いづらことから、多くの人が困っていると考えた。

しかし、それらのアプリの使い勝手はとても良かった。例えばGoogle map、Appleのmapで京都駅から、清水寺に行きたいとなると、入力するだけで、時間、乗るべきバスの番号、経路、値段など利用者が欲しい情報が表示される。さらに強みは現在地から利用できることで、紙の地図のような目印になる建物を探す必要もない。ただ、これらのアプリにも問題はある。日本語、英語で観光地名を打ったときはこれらの情報が全て表示されとても便利であったが、日本語や英語が母国語ではない人が、入力すると、これらの詳しい情報が入手できないことが明らかになった。これは英語で入力すると、詳しい情報が出るということを観光客に伝えると同時に、ほかの言語でも詳しい情報が出るように働きかける必要があると考える。次に知名度の問題である。Google map、Appleのmapの存在は知っている人が大半だが、交通機関の情報が詳しく出るとは思っていなかったという人が私たちを含めた大半の人の意見である。理由は、4年前のスマホの標準マップは交通機関の情報の表示がなかったからである。この時のイメージが強く今でも、Google map Appleのmap

は、徒歩の時に使うものというイメージが浸透している可能性が日本でも海外でも十分考えられる。ここで、観光地の名前を入れるだけで、乗るべきバス、バス停までの道のりがわかるという現状を知らせる必要がある。方法としては、バス停、地下鉄の駅構内、地下鉄バスの車内や放送など、人の目や耳に入りやすい場所で宣伝すれば、効果があると考えられる。

5. おわりに

2050年の日本総人口は9700万人。現在総人口より約3000万人が減り1億人を切る数字になってしまうし、高齢化により65歳以上の高齢人口も増えるので、京都を訪れる国内観光客は年々減っていくだろう。ありがたいことに、海外から京都市を訪れる外国人観光客は毎年増加している。だからこそ、この状況を見逃してはいけぬ。国内観光客も考えた上で、これからもますます増える外国人観光客のために京都市バスが抱えている問題点を改善しなければならない。私たちグループが提案した解決策が少しでも京都市の観光政策に貢献できたらと思う。

6. 参考文献

http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/sl_1_1_02.html 将来推計人口でみる50年後の日本
<http://www.city.kyoto.lg.jp/kotsu/page/000006712.html> 京都市バスの区間表示について
<http://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/page/0000240130.html> 京都市観光総合調査
<https://www2.city.kyoto.lg.jp/shikai/img/iinkai/kousui/kotsu260124-2.pdf> 市バスの「わかりやすさ向上」のためのマニュアル

